

船舶事故調査報告書

平成24年5月31日
 運輸安全委員会（海事専門部会）議決
 委員 横山 鐵 男（部会長）
 委員 庄 司 邦 昭
 委員 根 本 美 奈

事故種類	乗揚
発生日時	平成23年7月29日 00時00分ごろ
発生場所	愛媛県松山市下二子島西岸 山口県周防大島町所在の根ナシ礁灯標から真方位070° 3,150m付近 （概位 北緯33° 57.3′ 東経132° 31.7′）
事故調査の経過	平成23年7月29日、本事故の調査を担当する主管調査官（広島事務所）ほか1人の地方事故調査官を指名した。 原因関係者から意見聴取を行った。
事実情報 船種船名、総トン数 船舶番号、船舶所有者等 L×B×D、船質 機関、出力、進水等	ケミカルタンカー ^{けいよう} 慶洋丸、349トン 132484、日宣汽船株式会社 54.32m×9.00m×3.90m、鋼 ディーゼル機関、883kW、平成3年10月16日
乗組員等に関する情報	船長 男性 40歳 三級海技士（航海） 免許年月日 平成3年6月4日 免状交付年月日 平成22年6月8日 免状有効期間満了日 平成28年6月3日 航海士A 男性 59歳 三級海技士（航海） 免許年月日 平成7年11月30日 免状交付年月日 平成22年9月3日 免状有効期間満了日 平成27年11月29日
死傷者等	なし
損傷	フォアピークタンク、1番及び3番バラスタタンクに破口
事故の経過	本船は、船長及び航海士Aほか4人が乗り組み、シクロヘキサノン約500tを積載し、船首約2.8m、船尾約3.9mの喫水で伊予灘の推薦航路に沿い、クダコ水道に向けて北東進中、航海士Aが、平成23年7月28日23時45分ごろ、山口県東和町片島東方沖において、船長と当直交代して単独の船橋当直に就き、針路約040°（真方位、以下同じ）、対地速力約10ノット（kn）で自動操舵により航行を続けた。 航海士Aは、松山市二神島に並ぶ手前で右舷前方に両側の舷灯を見せる反航船1隻を認め、その動静を肉眼で監視していたところ、右舷灯だけを見せるようになったが、その後方に左舷灯を見せる別の反航船1隻を認め、その動静を肉眼で監視しながら同針路で航行を続け、レーダーを見なかった。 航海士Aは、二神島能崎を約0.5海里離れた付近を予定変針場所に定め

	<p>ており、同場所で右転し、松山市中島の島影等を見ながら船がいないところに向けて070°～075°前後に針路を定め、松山市上二子島に並んだら、松山市怒和島<small>ぬわしま</small>と松山市クダコ島の中央に向けて針路を転じる予定だった。</p> <p>航海士Aは、2隻目の反航船が右舷灯だけを見せるようになったので、23時58分ごろ、針路を約070°に転じて船橋左舷後部の海図台へ移動し、後方を向いて24時の船位を海図に記入したところ、下二子島に接近していることに気付き、急いで操舵スタンドに移動して左舵をとったが、本船は、平成23年7月29日00時00分ごろ下二子島西岸の浅所に乗り揚げた。</p> <p>船長は、乗揚のショックを感じて急いで昇橋し、機関を停止して浸水や油流出の有無を確認したのち、海上保安庁へ通報した。</p> <p>本船は、07時10分ごろ、来援したタグボートにより引かれて離礁し、自力航行して松山市松山港に向かった。</p>	
気象・海象	<p>気象：天気 晴れ、風向 西南西、風力 3、視界 良好</p> <p>海象：潮汐 下げ潮の中央期（約1.5knの南西流）</p>	
その他の事項	<p>航海士Aは、針路を約070°に転じた際、二神島能崎沖にいたと思い込んでいた。</p>	
分析	<p>乗組員等の関与</p> <p>船体・機関等の関与</p> <p>気象・海象の関与</p> <p>判明した事項の解析</p>	<p>あり</p> <p>なし</p> <p>なし</p> <p>本船は、二神島西方沖を北東進中、航海士Aが、反航船の動静の監視に意識を集中し、船位の確認を行っていなかったことから、予定変針場所を通過していることに気付かず、約070°に変針したところ、下二子島西岸の浅所に向けて航行することとなり、同浅所に乗り揚げたものと考えられる。</p>
原因	<p>本事故は、夜間、本船が、二神島西方沖を北東進中、航海士Aが、船位の確認を行っていなかったため、予定変針場所を通過していることに気付かず、約70°に変針したところ、下二子島西岸の浅所に向けて航行することとなり、同浅所に乗り揚げたことにより発生したものと考えられる。</p>	
参考	<p>今後の同種事故等の再発防止に役立つ事項として、次のことが考えられる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・船橋当直者は、通航船舶も多く、大小の島や浅所が点在する瀬戸内海を航行する場合、船位の確認を速やかに行うため、レーダーを十分に活用すること。 	